1．東日本大震災　復興支援活動

はじめに

龍谷大学では、2011年3月11日に発生した東日本大震の復興支援のために、ボランティアバスの運行を中心とした様々な取り組みを実施してまいりました。これらの取組は全て、発災直後に危機対策本部の下に発足した「学生ボランティア等の被災者・被災地支援活動検討プロジェクトチーム」で検討され、ボランティア・NPO活動センターがその事務局として通常業務を行いながら東日本大震災復興支援関連の事業実施に携わっています。

本章では、2014年度にボランティア・NPO活動センターがかかわった復興支援の取り組みについてまとめました。

第1回復興支援ボランティア

第2回復興支援ボランティア

第3回復興支援ボランティア

学長メッセージ　－東日本大震災四年目をむかえて－

私たちは、2011年3月11日の東日本大震災から4年目をむかえました。改めて犠牲となられた1万7千人を超す一人ひとりに、ご家族に心から哀悼の意を表するとともに、避難を余儀なくされ、故郷から遠く離れて厳しい生活をおくられている皆さま、約22万9千人の皆さまにお見舞い申しあげます。1日も早く平穏な生活が戻られますことを心から念じております。また、被災地、被災者へのさまざまな支援、インフラ整備などの復興に取り組んでおられるすべての皆さまのご尽力に深く敬意を表します。

私たちは、建学の精神、浄土真宗のみ教えである阿弥陀仏のはたらきの中で、自己中心性を自明視している自らのあり方、底なしの欲望充足、価値観等を見直し、いのちの連帯性、「同朋」であるという広い視野に立って、大震災後の具体的な諸課題に向きあうことが大切です。

本学では、ボランティア・NPO活動センターが中心となって大震災後の復興のための取り組みについて長期的活動を視野に入れつつ不断の実践と対話を重ねてまいりました。被災地から学生へ寄せられる期待は大きく、学生の主体的な活動を支援しながらの試行錯誤の4年間でありました。結果として400人を超す学生、教職員が現地に赴き、多彩な活動を展開することとなりました。彼らは被災地の現場に立ち、被災した多くの皆さまとの交流・対話によって、メディア情報だけでは伝わらない、言葉にすることができない真実があることを学びました。被災地の厳しい現実を目の当たりにして、そこにわが身を置いて「重ね描く」ことによって、遠く離れた京都での日常生活の中では感じることのない深い思い、人の痛みが解る豊かな人間性が育てられています。当事者にはなれないものの、そこに思いをはせ、「重ね描く」営みは、今私たちがそれぞれの場所で家族や親子、地域など関係を改めて見つめ直し、新たな公共形成などの大きな機縁になっています。昨年4月から、本学の実践真宗学研究科では、被災地の皆さんに寄り添う実践事例を踏まえて東北大学文学研究科と連携して建学の精神を具現化する「臨床宗教師」養成プログラムが発足しました。また、この度、深草キャンパスの「和顔館」の開館にあたり、宮城県石巻市雄勝町で泥にまみれた「雄勝硯」の洗いなどのボランティア活動に取り組んでいたご縁で、「雄勝石」を地下中庭に敷くことになりました。

さて、東日本大震災にともなう東京電力福島原子力発電所の事故は、豊かな国土を深刻な放射能で汚染し、大量の汚染水を出し続けています。原発事故は、核の平和的利用を掲げ、安全神話で覆っていた核エネルギーに依存した産業構造、核に関わる科学技術力、社会の効率や利便追求のあり方、過剰な電力消費の生活などを含め、日本のみならず世界に対しても近代的文明観を根源的に問う契機となりました。

去る3月9日に来日したドイツのアンゲラ・メルケル首相は、物理学者でもありますが、東京電力福島原子力発電所事故から深く学び、原発稼働の延長を決めていたドイツのエネルギー政策の大転換をはかり、2022年までの原発全廃を政治決断したと語り、日本とドイツが「脱原発」で足並みをそろえるべきだとの考えを示しています。地震列島に住む私たちの日本では、取り返しのつかない重大事故から何を学んだのでしょうか。リスクの甚大さを軽視してはいないでしょうか。放射能汚染により国土、地域から多くの人びとを離散させた深刻さをどのように認識するのでしょうか。今日、いくつかの原子力発電所で再稼働への手続きが進んでいます。私たちは立ちはだかる大きく、長期にわたる諸課題に直視しながらも、新たなエネルギー制度、自然再生エネルギーへの転換に向けた一歩を踏み出すことが大切です。本学では、「龍谷ソーラーパーク」を稼働させ、自然再生エネルギー

活用の方途を提起しています。

私たちはすべてのいのちを輝かしめたいとの南無阿弥陀仏のお心を受けとめ、多くの皆さまと対話を重ね、粘り強く信頼関係をつくりながら、恵まれたいのちを大切にするネットワークを形成して持続可能な日本社会を切り拓いていく。そして、今後も復興支援活動に取り組んでいきたいと考えています。どうぞ、皆さまのご支援とご協力を賜りますようお願い申しあげます。

2015年３月11日

龍谷大学学長　赤松 徹眞

復興支援ボランティア活動

2011年6月より、定期的に宮城県にボランティアバスを運行してきました。2014年度は復興支援のためのボランティアバスを3回運行し、通算で13回になりました。2014年4月初旬に筒井センター長と石川次長、竹田コーディネーターが、発災以来ご縁のある宮城県石巻市雄勝を訪ね、地元の人にヒアリングを実施し、ボランティアニーズがまだあることを確認した上で、今年度の復興支援ボランティア実施を決定しました。

復興支援ボランティア実施後は、必ず学内で活動報告会を開催し、参加できなかった人にも経験を共有する努力を積み重ねてきました。参加した学生も、ボランティアで得た経験を一人でも多くの人に伝えることが自分の出来る応援の形のひとつだと、友人や家族に伝える努力をしています。マスメディアでは被災地への関心の低下が指摘されるようになってきましたが、本学では、啓発活動の成果もあり、「東北でボランティア活動がしたい」という要望が学生から多数寄せられています。

参加者募集にあたっては、学生・教職員に対し、深草・瀬田・大宮の全キャンパスでコーディネーターが復興支援ボランティアについて募集説明会を実施し、活動趣旨・リスクを十分に理解した上で参加するように呼びかけています。今年度、第1～3回の募集説明会には計316人が参加し、その内の126名の応募がありました。宿泊などの関係上、定員を増やすことができないため、苦渋の選択で選考を実施し、各回、定員の30名ずつを選抜しました。キャンセル待ちをする学生も多く、希望する学生全員に参加してもらえないのが非常に残念でなりません。参加確定者には、毎回、別途説明会を実施し、スケジュールの詳細説明と活動に関する質疑応答、提出書類（参加申込書、活動誓約書・保証人同意書）、参加費（2万円）の受付を行った後、一人参加の学生も多いため、参加者同士の自己紹介等を行って終了します。

今までに参加した学生達は、自発的に連絡を取り合い、誘い合って、お世話になった地域の方たちを訪問したり、卒業後も後輩を激励するために、活動時期に合わせて石巻市まで訪ねて来てくれたりするなど、活動終了後もゆるやかなつながりが出来ています。

事 業 名	2014年度　東日本大震災　第1回　復興支援ボランティア
実施日／場所	2014年8月12日（火）～16日（土）4泊5日　宮城県石巻市雄勝
実施主体／運営	龍谷大学／ボランティア・NPO活動センター
参加人数	合計32名（学生30名／引率2名）

■概　　要

第1回復興支援ボランティアのメインの活動は、「雄勝湾灯籠流し」の実施・運営のお手伝いでした。

具体的な作業としては、地元の方と一緒に灯籠を約2000基作成し、それを作業場所から、実際に灯籠を流す船着き場まで運び、リレー形式で地域の皆さんと協力しながら漁船に積み込み、一つ一つのろうそくに火をつけながら海に流しました。翌日には、灯籠の回収・片づけを行いました。

作業の合間には、おがつ店こ屋街から船着き場までの道の清掃作業（雑草を抜くなど）なども行いました。また、雄勝病院の跡地や店こ屋街の周辺を各自で歩き、歩かなければ見つけることが出来ない、未だに残っている津波の傷跡を歩きながら見つけ、震災当時に想いを馳せました。作業終了後の夜には、地元の方と行政の方から、現在の雄勝の状況などについてお話を伺い、震災後の現状について学びました。

最終日には、全ての片づけが終わった後に、全員でふりかえりを行って気付きを共有し、地元の方から発災時の様子についてお話を伺いました。また、石巻市社会福祉協議会を訪問し、「住民生活における復興支援事業の取組について」と題して、石巻市全体の復興支援事業の取組について、石巻市社会福祉協議会の阿部由紀氏よりお話していただきました。

帰りのバスの中で、この活動全体を全員でゆっくりとふりかえりを行いながら、帰京。

■活動スケジュール

【1日目】

午前8時に深草キャンパス（京都駅集合は8時15分）を出発し、休憩を挟みながら22時過ぎに宮城県仙台市内にある仙台別院に到着。本堂で東北教区ボランティアセンターの活動についてお話を伺った後、各自部屋にわかれて宿泊。

※バスの中で仲間作りのために、自己紹介や「東北を知ろう」クイズなどのレクリエーションを実施すると共に、活動スケジュールなどもバスの中で確認しました。

【2日目】

午前7時30分に仙台を出発し、途中、石巻市釜谷山根にある大川小学校に立ち寄って慰霊碑に参拝した後、おがつ店こ屋街に移動し、地元の方から灯籠の作り方を教わりながら、作業を行いました。

作業終了後は、上品の郷で入浴を済ませてから、民宿（全勝旅館）に帰り、夕食後、地元の方から雄勝の抱える問題、高台移転や防潮堤建設の話などから始まり、震災の経験を活かして考案された災害時の情報伝達システムなどについて教えていただきました。

【3日目】

午前8時30分から、昨日に引き続き、灯籠流しに関する作業を行うと共に、周辺道路の清掃にも取り組みました。16時からの浜供養に参列した後、地域の皆さんとリレー形式で灯籠を船に運びこみました。交代で船に乗って、海上に灯籠を流す作業も担当させていただきました。暗闇の中を灯籠が流れる幽玄な風景を地元の皆さんと眺め、地元の皆さんが用意した供養花火を一緒に観賞しました。

【4日目】

午前9時におがつ店こ屋街前に集合し、流した灯籠の回収と後片付けをした後、全員でふりかえりを行いました。

昼食前に、地元の神山正行氏と高橋頼雄氏から発災当日のお話しを伺いました。

14時から17時まで石巻社会福祉協議会に訪問し、長年お世話になっている阿部氏から石巻市の現状とこれからについてお話を伺った後、質疑応答を行いました。

その後は、道の駅・上品の郷にて入浴と夕食を済ませ、バスの中でふりかえりをしながら京都に向けて出発しました。

【5日目】

午前6時に起床し、朝食休憩の後、バスの中でクールダウンのふりかえりを行いながら京都に向かい、京都駅と深草キャンパスにて解散。

■参加者の声

（参加者アンケートや寄せられた声からの抜粋）

- 今回、震災発生後からずっと参加したいと思っていた復興支援ボランティアに加わることができてやっと一歩進めたという印象です。
- 思っていた以上に素晴らしく密度濃い時間を過ごすことができました。学べることが本当にたくさんあって、貴重な体験をさせいただいた今回のこの活動に感謝しています。“ボランティアをする”ということ自体初めての経験だったのですが、ボランティアの意味について深く考えさせられました。自分の意志だけではなく、相手の気持ちをまず考えることが一番で、そこでそれが初めて“支援”につながることに気づかされました。“被災地の復興”に少しでも関われた、という事実が自分の中での誇りです。自分の成長にもつながる良い経験でした。
- 今回の活動を通して、復興支援の重要性を改めて実感しました。この5日間、灯籠流しの手伝いや地元の人々との交流を中心に活動してきましたが、地元の方々が心の奥底で悲しみを抱えながらも地元を活気づけ、「愛される郷土」を作るために奮闘しておられる姿が最も印象に残りました。
- 今回の活動を通じて、様々な体験をすることができ、震災の事ももちろんですが、それ以

外にも行政と地元住民の関係、過疎などの社会問題について、多くの事を考えさせられました。

■コーディネーター所感

「雄勝湾灯籠流し」は、震災前は、地元の人たちが一世帯で3つ灯籠を作り、地区ごとに持ち寄って続けてきた伝統行事です。震災があり、住んでいる人が少なくなって止めようかという話も出たそうですが、やり方を考えていろいろな人と相談しながら、何とか守ってこられました。

2012年からは、離れて暮らす方々が見に来やすいようにと8月14日に日程を変更して開催し、更に、今回からは、何か用事があって立ち寄った際に、灯籠作りに参加できるようにと、8月上旬から工房を開放し、誰でも灯籠作りができるように準備するなど、簡単に参加できる「参加の仕組み」が作られていました。この配慮から、できるだけ「地元の力」を大切にしたいという想いがヒシヒシと伝わってきました。

この想いを象徴するかのように、雄勝の関係者のFacebookに、次のようなことが書かれていました。「本来であれば地元の人々で完結するべき行事なのかなと思いつつも、なにぶん人の手が足りない。いつもお手伝い頂いている団体様や個人の方々には、お盆の大事なお休みに申し訳なく思っています。いずれこの先、お手伝いが少なくなっても続けられるやり方を考えなければ。今年は、地元の事業者様や個人様からご協賛をいただき、流し終わりに少しだけ花火が上がりました。他所の花火大会に比べたら本当に小さい花火。でもみんな喜んでいました。自分たちでお金を出して、思いをのせて見る花火。大きい、小さいなんて関係なくて。これでまた一歩、少しだけ前に進んだ感じが致します。」

私達の活動の在り方を問う一文だと思います。地元の人の声にしっかりと耳を傾けながら、地元の人の邪魔をしない、そして、地元の人に喜んでもらえて、参加した学生も嬉しくなる、学びにもなる。これからも活動を続けるのならば、当たり前ですが、両者にとって良い関係とは何かを常に考え、活動の在り方を模索し、柔軟に対応することを忘れてはいけないとあらためて思いました。

〈報告者：竹田　純子
（深草キャンパス　コーディネーター）〉

事業名	2014年度　東日本大震災　第2回　復興支援ボランティア
実施日／場所	2014年9月26（金）～29日（月）3泊4日　宮城県石巻市
実施主体／運営	龍谷大学／ボランティア・NPO活動センター
参加人数	合計34名（学生30名／引率4名）

■概　　要

第2回復興支援ボランティアの活動は、被災地緑化支援活動を行っている雄勝花物語ローズファクトリーガーデン（以下ガーデン）のお手伝い及び震災について学ぶことと、おがつスポレク祭りの準備、運営のお手伝いがメインの活動でした。

ガーデンでは、ガーデン内花壇の整備・造成、道路沿いの花壇の整備、津波についての学習、雄勝小学校跡地にて防災訓練などを2日間に分けて行いました。

おがつスポレクまつりは、大須小学校を会場に開催されました。名振、大須、三区、上雄勝、伊勢畑の5チームに分かれて玉入れや綱引きなどの競技7つを競い合いました。学生は、競技の準備や勝敗の記録などの役割を担当しながら、各地区に分かれて一緒に競技に参加したり、応援を行いました。

■活動スケジュール

【1日目】

午前8時に深草キャンパス（京都駅集合は8時15分）を出発し、休憩を挟みながら21時過ぎに宮城県石巻市内にある石巻サンプラザホテルに到着。各自部屋にわかれて宿泊。

※バスの中で仲間作りのために、自己紹介や「東北を知ろう」クイズなどのレクリエーションを実施すると共に、活動スケジュールなども

バスの中で確認しました。

【2日目】

午前9時30分から石巻観光協会のボランティア語り部である齋藤敏子氏に石巻市中心部を案内していただき、震災について学びました。新しい漁港が建設中で復興の息吹を感じつつ、もともと1740軒の家があった門脇地域が更地になり、草が一面に生えている景色に言葉を失いました。その後、大川小学校の献花台に参拝し、雄勝に移動しました。店こ屋街で活動している「おがつスターズ」の皆さんの手作り弁当をいただいた後、おがつスターズの活動について、メンバーの地元への想いについてお話を聞かせていただきました。

13時30分からは、被災地緑化支援活動を行っているガーデンで花壇作りや道路沿いの花畑の手入れを行いました。

17時に作業を終えて、上品の郷で入浴し、民宿に戻って夕食を食べた後、全員でふりかえりを行い、亀山旅館と長栄館に分かれて宿泊しました。

【3日目】

午前8時30分から大須小学校にて「おがつスポレクまつり」の準備・運営のお手伝いを行いました。また、地元の皆さんと一緒になって競技に参加して、声を限りに応援しました。休憩時間には、チーム龍大で即興リレーを行い、最後に皆さんと一緒に雄勝音頭を踊って祭りは終了しました。

終了後は、地元の皆さんと一緒に昼食の炊き出しの豚汁とおにぎりをいただき、休憩を取った後、片づけを手伝って、大須小学校を後にしました。

午後から、ガーデンに向かい、主催者であり、元雄勝小学校教員の徳水博志氏と一緒に、雄勝小学校跡地に移動しました。津波に襲われたその場所で、発災時の様子、避難方法等のお話を聴き、実際に避難経路を走って、当時の様子を再現しました。

ガーデンに戻ってからは、津波について、小学校で取組んだ心のケアについてのお話をお聞きし、事前に送った質問に対する応答の時間も作っていただきました。

17時に終了し、店こ屋街に少しだけ立ち寄った後、上品の郷で入浴・夕食を摂り、ふりかえりをしながら京都に向けて出発しました。

【4日目】

午前5時に起床し、朝食休憩の後、バスの中でクールダウンのふりかえりを行いながら瀬田キャンパスを経由して京都に向かい、京都駅と深草キャンパスにて解散。

■参加者の声・得られた成果など

（参加者アンケートや寄せられた声からの抜粋）

- 被災地を訪れて思ったことは、自分自身、生きているのではなく生かされているということを痛感しました。特に石巻市門脇地区と大川小、雄勝の風景は頭の中ではっきりと残っています。報道で見たような大きなガレキはありませんでしたが、生活用具や家の基礎の一部が残っていて、そこに人々の営みがあったことを感じとりました。
- 伝えたいことがたくさんできました。前回来た時は、重くずしりとするような感覚を覚えて、つらい、というイメージが強かったのですが、今回は、たしかにずしりという重い感覚はもちろん覚えたけれど、前を向く強さというか、すごく熱いものを感じました。絶対に忘れたくないと思います。
- 一番心に残っているのは、防災意識についてです。今まで自分が住んでいる地域に災害が起こるなど考えていませんでしたが、話を聞いて想定外のことがいつ起こってもいいように対策をとっておかなければいけないと感じました。津波のこと、地域とのコミュニティを築くこと、防災知識を増やし共有していくことが風化させない第一歩になるのではないかと思いました。

■コーディネーター所感

今回は、学生にとって非常に「学び」が多かったのではないかと思います。初日にお話を伺った語り部さんの「自立を妨げるボランティア」という言葉が、とても強く学生の印象に残ったようです。この言葉に含まれているたくさんの意味を誤解することなく、理解してもらうために、ふりかえりの中でこれをテーマに話し合ったりもしましたが、事前学習の中でも、もう少し「ボランティア」の概念を研修しておけば良かったように感じています。

雄勝でのガーデン作業やスポレクまつりへの参加を通して、たくさんの地元の人達と出会うことが出来ました。できる限りの大声で一緒に応援したり、競技に参加したりしながら、自然とコミュニケーションをとることが出来たようです。学生の発案で休憩時間に、学生全員によるリレーは、地元の人から「昔を思い出す」と大絶賛でした。時には若さを全面的に出して盛り上げるということは彼らしかできない活動なのだなと思いました。急に出てきた提案でしたが、臨機応変に雄勝支所の方と相談しながら対応できたのは良かったと思います。

最後に雄勝小学校跡で行われた防災訓練は、長時間のお話を聞くよりも、発災当時の緊迫感を体験的に学ぶことが出来ました。

地元のために活動することはもちろんですが、これからの活動は、「震災を学ぶ」「地元の課題を知る」ということも重要になってきます。今回のプログラムではそういったことに力を注ぎました。活動を体験した学生がその後どのような活動を行っていくのかに注目し、これからの活動の在り方を考えたいと思います。

〈報告者：竹田　純子
（深草キャンパス　コーディネーター）〉

事 業 名	2014年度　東日本大震災　第1・2回 復興支援ボランティア合同報告会
実施日／場所	2014年10月9日（木）17時30分～19時00分　深草キャンパス　21号館101教室
実施主体／運営	龍谷大学／ボランティア・NPO活動センター
参加人数	約90名

■概　　要

池田副学長の挨拶のあと、それぞれの回の活動の様子をムービーにまとめたものを上映しました。

おおよその活動内容を参加者に理解してもらってから、参加した学生が活動して感じたこと、考えたこと、伝えたいことなどをそれぞれが自由に挙手して報告しました。

■参加者の声

（参加者アンケートや寄せられた声からの抜粋）

- 私は2回目の復興支援ボランティアに参加したのですが、1回目の参加者の話が共有出来たのがすごく良かったです。また、1年生の頃から復興支援ボランティアに参加している4年生の先輩の話に心打たれました。“3年”という期間、ボランティアを通してみた風景、感じたことを詳しく聞くことが出来て良かったです。復興支援ボランティアに参加した人たちと共有するだけではなく、ボランティアにまだ参加したことのない龍大生にもっともっと知ってほしいと思いました。
- 最初のムービーで、活動や状況がわかって良かったです。自分もボランティアで宮城県に行ったことがあるのですが、テレビで見るのと、実際に見るのはぜんぜんイメージが違うということには本当に共感しました。そして、まだまだ進んでいない復興を、見た風景を友人やこのような報告会で伝えることは大切なことだと思いました。そして、現地の方々のお話をいろいろな立場の方から聴くことはすごく良いと思いました。様々なお話を聴くことができて良かったです。

・去年参加した経験もあり、今年の活動を見るのはとても刺激を受けました。もう一度今年も行けば良かったと感じました。今回参加した人たちが、地元の人やスピーカーの人から多くの話を聞けているのがとても、うらやましく思いました。私は受動的であり、あまり聞くことができず、受け取ったことも少なかったです。しかし、今回参加の人たちが、いろいろなものを受け止めて帰って来たということが嬉しく、うらやましいです。「ガレキが無くなったから、復興完了」。「何もないからもう終わったんだ」というのではなく、これからできる事が、今だからこそあるのだと思いました。

■コーディネーター所感

東日本大震災への関心の低下が心配されている中、いまだに報告会への参加が（ボランティアとして参加した学生も含め）約90名得られるということは、驚くべきことではないかと思っています。

毎回、報告会を開催するたびに、どの程度参加してもらえるのだろうか？という不安を感じますが、今年度復興支援ボランティアに参加した学生はもちろん、以前参加した学生やこれから参加しようとする学生が参加してくれ、学生たちは一生懸命、自分の想いを語ってくれました。

語ることによって気づくこともありますし、同じ思いを共有した人の話を聞いても気づくことがあります。そして、自分たちが聞いて、見て、感じたことを共有する機会を持つことは、学内で東日本大震災のことを風化させない一番の方法だと思います。これからも大切にしていきたいと思っています。今は、コーディネーターが活動の概要をまとめたムービーなどを使って説明してから、参加学生が活動の様子や感想などを語る形式をとっています。しかし、もっと学生の声を聴いてもらえるように報告会の形式・内容を工夫し、地元の課題などについても深く掘り下げて考える機会になるようにしなければならないと思っています。

〈報告者：竹田　純子
（深草キャンパス　コーディネーター）〉

事 業 名	2014年度　東日本大震災　第3回　復興支援ボランティア
実施日／場所	2014年11月14（金）～17日（月）3泊4日　宮城県石巻市
実施主体／運営	龍谷大学／ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	合計33名（学生30名／引率3名）

■概　　要

第3回復興支援ボランティアの活動のメインは「おがつ店こ屋街3周年記念ホタテまつり」の前日準備のお手伝いと、当日の運営補助、ブース出展でした。そのほかにも「一般社団法人みらいサポート石巻」に依頼し、語り部さんのお話を聴いたあと、石巻市街地を解説付きで視察しました。また、津波と火災の被害が甚大であった門脇地区で運営されている「ありがとうハウス」の尾形氏を訪ね、発災当時の話、発災前の話、今の想いなどを伺いました。

また、初めての試みとして、イベントの龍大枠ブースの企画をするコアメンバーを7月に募集しました。このメンバーで話し合って、今回の活動テーマである『結～これからも雄勝と～』を決定し、学生主体で準備を進めました。何をどう「結ぶ」のか、「行っただけで終わらず、これからもつながり続けていくためのきっかけをどう作るか」を念頭に置き、ブースの中身を決めていきました。10月には、今回参加する全メンバーが決定し、深草・瀬田の両キャンパスに分かれて、ホタテの貝殻を利用したホタテアート、参加者全員を紹介するボードや、手作り看板、お茶の勉強のための企業訪問など、授業の合間を縫っての準備が出発ぎりぎりまで行い、当日を迎えました。

■活動スケジュール

【1日目】

午前8時に深草キャンパス（京都駅集合は8時

15分）を出発し、休憩を挟みながら21時過ぎに宮城県石巻市内にある石巻サンプラザホテルに到着。各自部屋にわかれて宿泊。

※バスの中で仲間作りのために、自己紹介や「東北を知ろう」クイズなどのレクリエーションを実施すると共に、活動スケジュールなどもバスの中で案内しました。

【2日目】

午前8時に宿を出て大川小学校訪問し、献花台に参拝。

10時から一般社団法人みらいサポート石巻による語り部さんのお話をお聴きし、スタッフの方と一緒にバスで石巻中心部の被災地の視察を行いました。

12時30分に門脇地区でありがとうハウスを運営している尾形氏を訪ね、お話を伺った後、昼食に尾形氏が作った石巻焼きそばをいただきました。

14時から「おがつ店こ屋街3周年記念ホタテまつり」の前日準備を行いました。

20時半から、イベントの実行委員長の高橋頼雄さんから雄勝の現状についてのお話をお聞きしました。

【3日目】

午前8時30分から「おがつ店こ屋街3周年記念ホタテまつり」に参加しました。10時のオープンまでに準備を行い、開始後は、協賛をいただいた「一保堂のほうじ茶と井筒八ッ橋、今西製菓の京あめをふるまうコーナー」「ホタテアート」「生八つ橋販売」「ステージの運営補助」「ホタテ釣りの受付」「ロンくん・ロンちゃんじゃんけん大会」「ロンくん・ロンちゃんとチェキで記念写真を撮ろう」など、いろんな役割に分かれて、活動を行いました。イベントに登場した御輿も一緒に担がせていただきました。

20時に石巻を出発し、帰りのバスの中でふりかえりをしながら京都に向かいました。

〈協賛企業名と品名〉

（株）井筒八ッ橋本舗：八ッ橋、生八ッ橋

今西製菓（株）：あめ

（株）一保堂茶舗：ほうじ茶

【4日目】

午前5時30分に起床し、朝食休憩の後、バスの中でクールダウンのふりかえりを行いながら瀬田キャンパスを経由して京都に向かい、京都駅と深草キャンパスにて解散。

■参加者の声

（参加者アンケートや寄せられた声からの抜粋）

- ボランティアに参加する前は正直自分に何ができるのかよくわかりませんでした。自分には何か特技があるわけではないのですが、ただ楽しく会話をするだけでも充分な貢献をできると気が付きました。このことに気が付いたとき、自分という存在に自信が持てました。特別なことができなくても、復興支援に関わることができる。このことを周りの友人たちに伝えていきたいと思います。
- 毎回思うが、現地に行けば行くほど繋がりは増えるし、皆がとても温かい心で迎えてくれると本当に心底思う。1度関わったのだから最後まで。ゴールはないけど、これからも雄勝と。大好きな雄勝と一緒に成長して、助け合っていきたい。
- 「復興支援」という言い方が今となってはあまりしっくり来ないと感じるようになりました。支援となると、どうしても、こちらから、東北になにかしてあげるというニュアンスが入っているように聞こえます。これまであたたかく迎えて下さったこと、たくさんお話して下さったこと等、私がこれからもしていきたいのは、これらに対する恩返しです。

■コーディネーター所感

今回のプログラムは、今年度実施した3回のプログラムのうち、一番地元の皆さんと触れ合えるプログラムです。普段、自分からコミュニケーションをとるのが苦手な学生も、周りの積極的な雰囲気に背中を押され、地元の方に自分から積極的に話しかけることが出来ていたようです。2回目参加の学生は、「今年も会えたね！」と地元の方と抱き合っている姿も見られまし

た。

2011年11月から定期的に通っている石巻市雄勝。地元の人達と学生との絆が、少しずつですが築かれています。学生が異口同音に語るのは、「雄勝が大好き！」ということです。雄勝の皆さんの温かさに触れ、雄勝の美味しい料理を食べ、雄勝の皆さんが抱える課題を学び、その課題を乗り越えるために活動されている皆さんの姿に刺激を受けて、雄勝が大好きになっています。卒業後もこのイベントに合わせて駆け付けてくれる人もいるほどです。在学生が声を上げてくれて、卒業生も含む「雄勝の会」というつながりまでできました。大学の活動報告会もあるけれど、自分達でも企画したいと、雄勝の現状を伝える展示会も別途企画されました。

この気持ちが増々広がっていけるようなプログラムを、今後も展開していければと考えています。

〈報告者：竹田　純子
（深草キャンパス　コーディネーター）〉

事 業 名	2014年度　東日本大震災　第3回　復興支援ボランティア報告会
実施日／場所	2014年12月9日（火）17時30分～19時00分　瀬田キャンパス　3号館105教室
実施主体／運営	龍谷大学／ボランティア・NPO活動センター
参加人数	約50名

■概　　要

竹田コーディネーターから活動全体の概略説明の後、おがつ店こ屋街のイベントに出展する龍大ブースの企画・準備をしていたコアメンバーから、今回のテーマである『結～これからも雄勝と～』に込めた「参加者のみんながそれぞれの想いを雄勝と結んで、これからもつながって行きたい！」という想いについて説明が行われました。その後、活動に参加したボランティアから「伝えきれないほどの熱い想い」や「雄勝での出会い」などについて報告が行われ、最後に筒井センター長が全体のまとめを行いました。

■参加者の声・得られた成果など

（参加者アンケートや寄せられた声からの抜粋）

- コアメンバーの方々や行った方々のお話はどれもとても興味深く、非常に満足できました。今回のテーマは「結」とのことでしたが、参加したみなさん全員が「つながり」を感じられたということがとても伝わって来る報告会でした。
- 「結」という言葉がすごく心に響きました。3年経ったからこそ、大切にすべきことだと思います。現地の人から「また来てくれたのか」と言ってもらえるまでのつながりができたことも、みんなの力だと思います。実際に行った人の声を聞いて、現地の雰囲気や複雑な思いを感じることができました。皆さんの伝えたい思いがあふれ出ていることを、表情や声、身体全体を通して感じました。
- 続く力と出会うもののすばらしさを感じることができた。言葉にならないものが、たくさんある中の一つだと思う。
- 一人一人の話が濃かったと思いました。それぞれ行くきっかけになったことや実際に感じたこと、そしてこれからのことを話してもらって現実的でよかったです。人それぞれ感じたことはやはり伝えてもらって分かるものなので、今回の報告会に参加できてよかったです。そして多くの経験を聞かせてもらってありがとうございました。

■コーディネーター所感

今回の報告会も参加した学生の熱い想いが伝わる報告会でした。石巻市で出会った人々から受け取った想いをできるだけ伝えたい、自分たちが結んできたご縁を広めたい！という想いが溢れていました。

筒井センター長が「『伝えきれないほどの想い』があるということは素晴らしい」おっしゃっていましたが、まさに、伝えきれない想いを言葉だけでなく、その場の熱気で参加した人たちと分かち合うことの出来る報告会になったので

はないかと思います。

前回の報告会でも感じた通り、報告会の持ち方にはたくさんの工夫の余地があります。もっと準備をしてから報告をした方が良いのかもしれません。でも、鉄は熱いうちに打てというように、熱い想いに触れてもらうためには、活動終了後あまり期間を開けずに実施したい。このあたりのバランスをもっと工夫してより良い報告会を実施したいと思います。

〈報告者：竹田　純子
（深草キャンパス　コーディネーター）〉